様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３５２００５３

研究課題名（和文）宋代易学史の再検討―象数学派を中心に―

研究課題名（英文）A study on Yi Xue of the Song Dynasty

研究代表者
辛　賢（SHIN, HYEON）

大阪大学・文学研究科・講師

研究者番号：７０３７９２２０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、儒教経典の一つである『易経』が中国思想史においてどのように理解され、研究されてきたのか、とりわけ、北宋の邵雍著『皇極経世書』をとりあげ、宋代易学の思想史的特徴を探った。邵雍の易学は、易を暦の数理に合わせる伝統的方法を逆転させ、暦を易の数理に合わせることによって誤差をなくし、両者の整合関係をみごとに証明するものであったが、じつは漢代の『緯書』にも同様の解釈法が確認される。邵雍は漢代の伝統的方法を受け継ぎつつ、より徹底した両者の整合化をはかるものであったということを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This research is a study on how far I-ching is understood and being studied in China intellectual history. Especially by taking “ the Huangji Jingshi 皇極經世" which is written by Shao Yong of Northern Song Dynasty, we can discuss the art of divination characteristics. Shao Yong reverses the traditional method to match fortune with calendar. Thus, he eliminated the errors and impressively proved the harmonize relationship between them by mathematically matching calendar with fortune. However, the same interpretation method was also being identified in “Yishu 緯書” (Chinese books which describe predictions and others) during Han dynasty. Therefore, this traditional method of Han dynasty was inherited to measure more precisely both fortune and calendar harmonization.

研究分野：中国思想史

キーワード：易学　邵雍　張行成　漢易　宋代　先天易　皇極経世書　翼玄

１．研究開始当初の背景

これまで進めてきた漢易研究の成果をもとに宋代易学における象数学の実態を明らかにする。漢代から魏晋にかけての儒教経学、とりわけ易経は、天文学・暦学・物理学・生物学などを無矛盾的に包摂する大統一理論として構想された術数論の根底に置かれていた。そういった『易』の数理的機能が、後の宋学において「数」そのものを形而上的な命題として捉える思想史的変遷について注目し考察する。

２．研究の目的

（１）本研究は、日本において今井宇三郎『宋代易学研究』（1958）以来、半世紀もの間、手薄となっている宋代易学史を再検討し、今井の段階では及ばなかった儒・道教の両面における術数学の成果を総合することによって新たな宋代易学史を構築することを目指す。そこで、「古易」と「新易」が交差する唐・宋に焦点を当て、両代における漢易術数の波及、その展開の様相を考察する。

（２）また、一般的に易学・術数学研究は、理論解明に完結しがちであるが、本研究では、理論解明に止まらず、易学の術数論のもつ歴史的・哲学的意味について考察する。そこで、漢易の根幹をなす「数」と「象」の両概念が、三国以降、唐宋にかけてどのように考えられていったのか、その議論内容を探り、宋学における「数」「象」の哲学的意味について分析を試みる。

３．研究の方法

（１）全体として本研究に関わる必要な文献・論文資料を収集・整理しながら、取り組む課題と問題点を把握するなど、基礎的な作業を行う。これに並行して邵雍の『皇極経世書』に関する考察を行う。『皇極経世書』における「元・会・運・世」の暦面構造の特徴とその来源問題について考察する。ここでは『易緯乾鑿度』に見える歴史年譜（世軌構造）との関連性が窺われ、両者の理論的・思想的関係について分析する。

（２）邵雍の『観物篇』における議論内容、とくに「意・象・数・言」の哲学的議論について検討を進める。また、宋学における絶大な影響を与えた先天学の理論とその思想史的意味について検討し、前漢揚雄の太玄易との関連性について考える。

（３）邵雍の学問と深い関わりをもつと予想される張行成の『翼元』『周易変通』などの著述をとりあげ、分析を行う。

（４）朱子の術数学の実体について探る。とくに邵雍の先天学を高く評価していた朱子について、邵雍の学問に対する理解・認識はどのようなものであったのかについて探り、総額における象数学の展開、その思想史的特徴を探る。

４．研究成果

（１）北宋・邵雍の易学について検討を行った。邵雍の代表的著述である『皇極経世書』は歴史年表として作られたものであるが、その暦年表は「元会運世法」と呼ばれる邵雍独自の周期システムにもとづいて構築されている。邵雍の「元会運世法」に関する研究は、これまでたくさんの先行研究が発表され、その数理構造が十進法によって進行されていることが明らかになっている。ただし、元会運世法による暦年構造が易の六十四卦システムとどのように結合しているのかという問題については、隔靴掻痒の感を拭えないものがある。

（２）そこで、「元会運世法」と易の六十四卦との構造的関係に注目し、検討をおこなった結果、次の構造的特徴を見出すことができた。一つは易の六十四卦と元会運世法との間には有機的な関連性が見られ、一体的な構造として築かれているということである。具体的には、元会運世法は、暦年を先天易の六十四卦次序に結合させ、八卦をカテゴリーとする周期サイクルを表していた。さらに上下八卦の定数を互いに組み合わせることによって、六十四卦全体における元会運世の暦年数を機械的に算出していた点である。

（３）もう一つの注目すべき点として、元会運世法と六十四卦とにおける数例構造は、南宋・蔡元定が示した「経世天地始終数図」と全く一致していることがということである。六十四卦における各周期の積算数からは、一定の数理的規則性を見出すことができるが、それは十二と三十が交互に演算されていく展開を示している。ところが、それに酷似した技法が遡って前漢の揚雄が著した太玄易にすでに見られる。

（４）『太玄』に関する研究は、これまで漢代の太初暦にもとづく三進法的構造であることが明らかにされており、さらに八十一首七百二十九賛が一・二・三の三数の組み合わせによる(1.1)(1.2)(1.3)(2.1)(2.2)(2.3)(3.1)(3.2)(3.3)という九つの数列によって一貫して構築されているということもすでに指摘されている。ところが、邵雍の元会運世法の数理構造は蔡元定の「経世天地始終数図」に示されているごとく、(1.1)(1.2)(1.3)(1.4)(1.5)(1.6)(1.7)(1.8)(1.9)(2.1)……(9.5)(9.6)(9.7)(9.8)(9.9)と、一～九の九数の組み合わせによる数列を表すものであった。それはまさしく太玄易における一二三の三数の組み合わせによる数列構造を髣髴とさせるものであり、こうした太玄易の数理的発想・技法が千年もの歳月を経て宋代の象数学に受け継がれている点、その理論上の継承関係は今後も注目すべき問題である。

（５）上記の研究に関連し、南宋・張行成の

『翼元』を取り上げ、検討を行った。『翼元』は、前漢末の揚雄が著した『太玄』の術数理論を詳述したものであるが、これまでほとんど注目されることなく、その資料的価値が見過ごされてきた。本研究でとくに注目した問題は、『翼元』の学術的意味である。そもそも『太玄』という書は、後漢の班固もお手上げしていた難解な書として知られ、のちの司馬光や邵雍すら曖昧にしてきた難物であった。『太玄』の八十一首七百二十九賛という独自の数理がどのようなメカニズムを有するものなのかについて、長い年月不明のままであった。そして明・葉子奇『太玄本旨』、そして清・陳本礼『太玄闡祕』に至ってはじめてその実体が明らかになったのであり、それがこれまでの認識であったが、それよりも遡って南宋の張行成によって太玄易の数理構造が見事なまでに突き止められていたということである。

（6）これまで『翼元』はほとんど注目されることなく見過ごされてきたが、今後も引き続き検討すべき貴重な資料である。張行成は『翼元』のほか、いくつかの著述を著しており、そこにも自身の深い数学的洞察力を余すところ無く発揮していることが確認される。このような学問的背景には、張行成は自ら触れているように、「数」は「理」の代称、もっといえば「数」は「理」そのものであるとする張行成の思想が窺われ、それは邵雍以来の宋学的世界観を引き継ぐものであったと言える。

（7）邵雍の「元会運世法」と、漢代の『易緯乾鑿度』との関係について考察した。漢代易学の代表的理論である、京房の「六日七分説」は、六十四卦中の四正卦（坎・震・離・兌）を事実上排除することで、六十卦のみが暦面の数理に組み込まれるという変則的な方法が取られており、こうした易と暦との矛盾を解決するため、従来とはまったく異なる発想の転換が行われていたことが『易緯乾鑿度』のなかから確認できる。そもそも本来性を異にする易と暦との間における数理的誤差・矛盾をいかに解決し、整合化できるかが漢代易学の課題であったが、『易緯乾鑿度』にみられる「六十四元法」は、暦面に易の数理を合わせる従来の方法をやめ、易の数理（六十四元）に暦面を組み込むという逆転の発想によるものであった。つまり、六十四卦はは、六十四元（291840 年）にして卦・爻・策がすべて尽き、暦面の年・月・日と揃って合元することで、易と暦との数理関係を無矛盾的に解決する一応の方法として提示されたのである。易を暦の数値に組み込んでいた従来の方法は暦を易の数理へと逆転したのであるが、こういった発想・方法は、のちの邵雍の「元会運世法」のなかで引き継がれていることに注目すべきである。

（8）邵雍の『観物篇』を取り上げ、考察を行った。邵雍は、元・会・運・世をもって万物の変化、歴史的な四大周期としている。そして、それらの四大周期を交合に組み合わせ、元元・元会・元運・元世を「春」、さらに会元・会会・会運・会世を「夏」、運元・運会・運運・運世を「秋」、世元・世会・世運・世世を「冬」という、合計十六カテゴリーを編みだして、万物の生成から消滅にいたるまでの時間の壮大な流れを、一年における四季の推移と同様のメカニズムとして解釈している。それはまた、人間社会における歴史的法則性をも提示するものとして、歴史の変遷は、季節の法則的変化と同一の線上に置かれて解釈している点も注目すべき特徴である。たとえば、元・会・運・世に応じ、皇・帝・王・伯のカテゴリーとして分類し、これらの四カテゴリーを組み合わせ、皇皇・皇帝・皇王・皇伯・帝皇・帝帝……伯帝・伯王・伯伯という十六のカテゴリーを生み出し、皇皇から帝帝へ帝帝から伯伯へと、歴史は変遷し、下降していくと解している。「皇皇」の時代は、「道を以て徳を行う」時代であるのに対し、末世の「伯伯」に至ると、「力を以て力を行う」とする。邵雍は、このほかにも「士・農・工・商」「仁・義・礼・知」「性・情・形・体」などと、四つのカテゴリーに分類し、同じく元・会・運・世に対応させることで、各時代の歴史的現象や特徴を割り出そうと試みている。邵雍の元会運世法は、万物の生成・変化・消滅する自然の変化をもって、興亡衰退を繰り返す人間社会の歴史的変遷と同様のメカニズムとして説いているという点は、大いに注目すべきところである。

（9）朱子の術数・象数・易学に関するとらえ方を考察する第一歩として、『朱子語類』巻一〇〇「邵子之書」を取り上げ、訳注を作成し、邵雍の思想に対して朱子はどのような認識をもっていたのかについて考察をおこなった。まだ検討途中にあり、この問題については、今後も引き続き考察の予定である。

5．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）

① 辛賢、「首」から「数」へ：張行成『翼元』をめぐって、知のユーラシア（堀池信夫編）、査読無、2011、304-324
② 辛賢、邵雍「先天」初探：元会運世法の暦年構造、宋学西漸Ⅳ：西洋哲学における宋明理学の受容と展開、平成 23 年度科研報告書（基盤C 代表：井川義次）、査読無、Ⅳ巻、2012、23-36
③ 辛賢、邵雍の「皇極経世」とその背景―理数を求めて―、林田慎之助博士傘寿記念三国志論集（共著）、査読無、2012、321-352
④ 辛賢、『朱子語類』巻一百邵子之書訳注（その一）、大阪大学大学院文学研究科紀要、査読無、53 巻、2013、1-40

⑤ 辛賢、漢代経学の相貌―宇宙論的「知」の形成、学問のかたち―もう一つの中国思想史（小南一郎編著）、査読無、2014、33-68
⑥ 辛賢、『朱子語類』巻一百邵子之書訳注（その二）、大阪大学大学院文学研究科紀要、査読無、55 巻、2015、19-41

〔学会発表〕（計１件）
① 辛賢、漢代経学の相貌―宇宙論的「知」の形成―、第 57 回国際東方学者会議シンポジウム「中国思想史の基礎」、2012、日本教育会館（東京都）

〔図書〕（計１件）
① 辛賢（編著）、明治書院、知のユーラシア４宇宙を駆ける知―天文・易・道教、2014、236

６．研究組織
(1)研究代表者
辛 賢（SHIN, Hyeon）
大阪大学・大学院文学研究科・講師
研究者番号：70379220